



カトリック長崎大司教区 広報委員会
〒852-8113 長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
Tel. 095-843-3869
Fax 095-843-3417
振替口座 01880-5-2699
発行人 山田良秋
印刷所 インテックス
株式会社 インテックス

移転に伴う工事始まる

以前お知らせしていました通り、カトリックセンターに所在を置く教区本部事務局や法人会計事務室などは、2025年1月に大司教館へ移転する予定です。これに伴い、大司教館の改修工事が7月中旬に始まり、ご理解とご協力をお願いいたします。

昨年5月、山内清海師(長崎教区司祭)による長崎教区主催の講演会「永井隆博士が私たちに遺してくださったもの」が浦上教会で行われました。このとき語られた永井隆博士(1908~1951)の撰理論については昨年8月号の本紙を通じてお伝えしましたが、講演の最後に語られたフランス人哲学者ジャン・ギトン氏(1901~1999)のことは掲載することができませんでした。今回、山内師にあらためてインタビューし、ギトン氏に関わる話をお聞きしました。永井博士、ギトン氏、世界平和を願って祈り、行動し、亡くなっていった多くの人々が「私たちに遺してくれたもの」は何だったのでしょうか、ともに考えたいと思います。山内師の話しを質問と応答の形でここに掲載いたします。(聞き手・文責 広報委員会)

人々が私たちに遺してくれたものとは

山内清海神父に聞く 永井隆博士に関する講演会に続いて

1989年8月1日付「カトリック教報」の記事「ジャン・ギトン氏講演」からの抜粋。

「フランスの著名なカトリック哲学者ジャン・ギトン氏が6月25日、里脇枢機卿の招きで長崎を訪れ、浦上教会で講演を行った。1901年生まれで88歳(中略)ジャック・マルタンやエチエン・ジルソンと並びカトリック三大哲学者の一人に数えられている。哲学だけではなく、信仰に支えられながら哲学していくという、哲学と信仰を調和させた偉大な哲学者。ピオ12世以後の歴代の諸教皇と親しく、とくにパウロ6世には、第2バチカン公会議で、信徒としてただ一人発言を許されたほど信頼が厚かった。

講演は午後7時から通訳を入れながら約45分行われ、聖堂内には約800人の聴衆がギトン氏の話に聴き入っていた。ギトン氏は講演の中で、原爆によって破壊された長崎と長い迫害に耐えて信仰の火を守り続けてきた長崎の特異性をあげながら、人類が真の意味で発展していくためには、カトリック信仰がどうしても必要であると力説した」

長崎訪問の際にギトン氏を案内したのが、かつて氏とローマで出会った山内清海神父だった。

ジャン・ギトン氏との出会い

ローマで出会ったと聞きました... 第2バチカン公会議(1962~1965)のとき、世界中から司教が招集され、各地から哲学者、哲学者、専門家が招かれました。ジャン・ギトンは教皇パウロ6世の特別な要請で哲学者として招かれ、信徒でただ一人、神父たちに公的に発言することが許されました。非常に良い発言をし、脚光を浴びるわけです。



昨年5月14日、浦上教会で開催された講演会での山内清海師。1935年生まれ。長崎教区司祭。福岡サン・スルピス大神学院院長など歴任。2019年引退。長崎市在住。

は大変な事件だったのです。フランスの教会全体が自分たちのことのように喜んだといえます。主任神父は子どもたちに次のように話します。「長崎のために祈ろうじゃないか。長い間潜伏し、長崎の信者は今とても貧しい。お金も土地も何もないんだ。だから、犠牲をしよう。金曜日のおやつをやめよう。そして、祈ろう」と。このときジャン・ギトンは日本という国を初めて知り、あこがれを持ったわけです。

今晩話したい講演のテーマが決まった」と言うので「テーマは何ですか」「二つの火。燃える火だよ」彼はそれ以上そこでは何も語らなかったため、講演会を待つしかありませんでした。

もう一つ、原爆が投下され廃墟となったあの地で皆がどう生きているか。信者たちは永井隆博士が唱えた「撰理」を本当に理解し受け入れているか。再び立ち上がった長崎の復興の姿を見たい。だから長崎に行きたい、と話しました。

「二つの火」の意味は、講演会を聴いて初めて分かりました。(以下、講演内容の要約)

長崎を訪問、浦上教会で講演会

長崎を訪問した当時のことを教えてください

その少し前、私は福岡の大神学院にいた頃病気になる、復帰しましたが健康状態は不安定でした。その後、佐世保市の大崎小教区(1989年5月21日付新設)に初代主任として派遣されます。着任後、突然、里脇枢機卿から呼ばれ、フランス大使館から届いた知らせを伝えられました。

人類は二つの火を体験しました。一つは、火の発見。人類は火を発見し、文化が始まり、新しい歴史が始まりました。

フランス革命200周年にあたってのことだと記憶していますが、特別文化使節として公式にジャン・ギトン氏が日本に来ることになり、「ぜひ長崎に行きたい。長崎の信者に会いたい」と言っている。何か方法はないだろうか」というものでした。

もう一つは、戦争の火。もちろんその中に長崎の殉教と原爆の火が含まれています。これによって、皆すべてのものを失いました。しかし、新しく生まれ変わります。信仰に燃える信者の群れが残りました。第二の火も、第一の火のときと同じように大きな使命があります。新しい文化、平和の文化をつくらなければなりません。

すでに高齢となっていた彼は、体に鞭打って一度長崎に来たかったのでしょうか。急ぎよ浦上教会で講演会を開くことが決まり、里脇枢機卿から通訳と案内役を言われましたが、通訳は文科省が派遣した担当者がいました。

「二つの火」の意味は、講演会を聴いて初めて分かりました。(以下、講演内容の要約)

ただ、通訳はせずとも私も講演会のテーマぐらいは前もって知っておきたかった。講演の日に、彼が「如己堂に行きたい」というので案内し、永井博士のことを15分ぐらい説明しました。話している間、彼からは何の返答もありません。「私のフランス語が伝わっていないんじゃないか」とも思いました。

「二つの火」の意味は、講演会を聴いて初めて分かりました。(以下、講演内容の要約)

しかし、彼は直立不動のまま黙って聞いていました。話し終わった後、沈黙が続きました。そして、「ありがとう。いいところに連れて来てもらった。私が望んでいたのはここだった。ここで、私が

「二つの火」の意味は、講演会を聴いて初めて分かりました。(以下、講演内容の要約)

一つは初聖体のときのこと。皆で100人ぐらいの子どもたちが一緒に受けたといえます。主任神父が、1865年長崎で信徒が発見された出来事について話しました。これは、プティジャン神父の故郷フランスの教会にとって

「二つの火」の意味は、講演会を聴いて初めて分かりました。(以下、講演内容の要約)

ほしかげ

8月は長崎にとって平和を思う月。教区では9日の平和祈願祭、佐世保の聖母平和祈願祭など平和関連行事が行われる。この夏は国際的な平和活動も加わり、聖地のこどもを支える会主催による「平和の架け橋」プロジェクト、イスラエル・パレスチナ・日本の共生を求めて若者の交流会が長崎で行われる。また、パックス・クリスティ韓国主催で、核兵器なき世界へ向けて「長崎カトリック平和フォーラム」が開催される。昨年、サンタフェ・シアトル・広島・長崎の日本4教区が宣言した「核兵器のない世界のためのパートナーシップ」も、その輪を広げようという活動が続けられている。▲戦前、林隆吉のペンネームで漫画「コーチャン」や多くの童話を本紙に執筆し、軍医として出征した先からも挿絵付の記事を送り、教区広報にご協力くださった永井隆博士は、エッセー「平和シール」(長崎の花)中で語っている。「平和を!...」この願いを一番強く叫びたがっているのは、将軍でもなく、社会運動家でもなく、政治家でもなく、実に私たち町民なのです。一人ひとりの声はよし細くとも、行いはたとひ小さくとも「平和を...」「へいわ!...」とその願いを千人万人千万人、一つに集めたら、一年二十年と続けたら、これこそ大きな強い、戦争防波堤になるでしょう(永井隆全集IV)▲平和を求める暑い夏が続く。(秋)

↓2面へ続く

山内清海神父に聞く

—永井隆博士に関する講演会に続いて

人々が私たちに遺してくれたものとは

↓1面からの続き

ギトン氏が遺してくれたもの

—再び会うことはありましたか

それから月日が流れて、お互い音信不通でした。私は福岡を離れ、そのまま長崎教区で働くことになりました。

1996年、教皇ヨハネ・パウロ2世が「いのち」の尊さについて説いた回勅「いのちの福音」を発表し、世界中の話題となりました。島本大司教は私に、健康が許す限りこれを勉強し、皆に知らせるようにと。それから外国に行くようになり、勉強したことを帰ってきてすべて発表し、研究したことを本にまとめ、教報にも連載し伝えました。それが私の仕事だと思っていました。

その頃、ジャン・ギトンの秘書からの手紙が、転送に転送を重ねて私のもとに届いたんです。手紙には、ギトン氏が「山内はどうしているだろう」と話している、と書かれていました。また、体調がおもわしくない様子もうかがえました。「機会があったらおいでください」とあり、私はすぐにパリに向かいました。

病院の大きな一室で、とてもスマートで背の高い紳士だったギトン氏が、小さくなってベッドに横になっていました。秘書が彼を起こそうとしたけれど、起きません。祝福だけして帰ろうと思ったところ、秘書が「少し待って」と私を止め、彼に声をかけ続けました。

そのうちに秘書が「えっ？もう一度言ってみようか？」とギトン氏に何度か聞き直していたのです。そして、秘書が「意味が分からないのだけれど、『私は燃え尽きた』と山内に言ってくれ」と話しています。何のことか分かりますか？と、そう言われたんです。

「はい、二人の話なので、私にはよく分かります。二人の約束です」

私はギトン氏を祝福して、逃げるように帰りました。なぜならば、「俺は燃え尽きたよ。おまえはどうだ」と聞かれているような気がしたからです。この言葉が、私が聞いた彼の最後の言葉でした。

—ギトン氏のメッセージから思うことは

ジャン・ギトンは最後に「私の哲学的遺言」という本を書きました。哲学者として生きた過去と、自身の思いを小説的に書いています。「自分の人生に足りなかったものは何か。私はたくさん仕事をし、教会のために働いたけれど、一つ足りなかった。それは、愛だ」と語っています。「愛がなければすべてはむなししい」というパウロの言葉が、ここで違った形で表現されています。

「人間の生涯の価値は愛だ。隣人愛だ」これが彼の最後の本なんです。遺言なんです。だから我々に遺しているのは愛だよ、と伝えていきます。

愛があれば、今のような残酷な迫害は起こりません。これこそ平和の原理です。ジャン・ギトンのメッセージは現代的な声なんです。

彼から「燃え尽きたよ」「燃え尽きたよ」と言われ、そしてあの日「おまえはどうなんだ」と聞かれていたような気がしたんですね。私に与えられたメッセージだと思っています。

どこでどんな仕事をするにしても、それを神のみむねとして十分に生きること、これが神の摂理を生かせることになるんじゃないでしょうか。

—いま一番伝えたいことは何でしょうか

私は今、平和というものをとつとつすべての人に意識してほしいと願っています。長崎を平和の町にしたい。平和のために働くことは私たちの使命だと思っています。

被爆79年

平和祈願祭

8月9日(金)

*平和祈願ミサ

18時30分(浦上教会)

*たいまつ行列

20時予定

(浦上平和公園)

2020年「被爆75年から5年間のチャレンジ」 https://nuclear-free.net/ 核なき世界基金

井持浦ルルド祭

創設125周年を祝う

今年ルルド創設125周年を迎えた井持浦ルルド祭が、5月12日(日)井持浦教会で、中村倫明大司教の司式により執り行われた。



井持浦ルルド祭は、当時五島の司牧を任せられていたパリ外国宣教会ペルー神父の呼びかけで作られた日本で初めてのルルドだ。ペルー神父の呼びかけに応じた信徒の協力で、五島の各地から美石が持ち込まれ、施工も信徒が担当し1899年に完成した。



記念祭当日は雨天で聖母行列は行われなかったが、

聖霊の導きに従うように

雲仙殉教祭

5月19日(日)雲仙メモリアルホールを会場に、長崎大司教区主催、長崎北地区評議会担当の雲仙殉教祭が行われた。13時開会。ミサに先立ち、滑石小教会の子どもたちによる信徒発見物語

「あ、サンタ・マリアさま!」の朗読劇の映像が上映され、皆聴き入っていた。ミサは、中村倫明大司教の司式、約30人の司祭団の共同司式のもと、各地から約1000人の信者が参加して行われた。



大司教は説教の初めに、名作『アラジン』の主題歌「A whole new world(まったく新しい世界)」を流し、ストーリーを紹介しながら「今日は聖霊降臨のお祝い日でもあります。考えれば、聖霊降臨こそまったく新しい世界です」と語った。そして、「自分のためではなく人のために」三つ目の願いを使った物語の主人公を例に、教会も人々のためにあると述べ、私たちがすでに与えられている聖霊をもっと意識し、信頼し、その導きに従うようにと説いた。

最後に、聖霊の恵みのうちに神にすべてをゆだね信仰を証した雲仙の殉教者たちについて語り、「殉教者とともに神様は確かにおられた。聖霊は注がれていた。ここに天国があった。今日、雲仙殉教者たちをたたえながら、私たちが神様の御旨に従い、人のために生きるという私たちの使命を確認して恵みを願いましょう」と呼びかけた。

ミサ後、参加者は雲仙地獄のキリシタン殉教記念碑まで徒歩巡礼に向かっ祈りをささげた。雲仙殉教祭に初めて参加した女性信徒は、「教会から約20人でバスに乗って来ました。皆さんと一緒に歩き、お祈りし、聖霊とたくさんのお恵みを感じたいように感じています。殉教地で熱湯が沸き上がる様子を見て、殉教者のことを思い、祈りました」と話した。

2025年聖年 希望の巡礼者 2025年は「希望の巡礼者」をテーマとする聖年の年です。パチカンでは今年12月24日(火)に聖ペトロ大聖堂の「聖なる扉」が開放され、12月29日(日)にはすべてのカテドラルで教区司教により聖年の開幕としてのミサがささげられる予定です。長崎教区における聖年の過ごし方については今後お知らせしていきます。聖年の準備のため、引き続き祈りましょう。

CALIS カリス通信 8月号 カトリック火災共済制度のご紹介 「カトリック火災共済制度」は、教会、修道院、学校、幼稚園、病院等のカトリック系関連諸施設を対象とした火災保険(火災共済)です。火災保険で補償されるリスクをご案内します。 ●火災・落雷・破裂・爆発 漏電による火災や、落雷により建物に被害を受ける事故が増えています。建築費が高騰しており、電気設備や屋外設備の復旧費用は高額となることから、十分な備えが重要です。長年にわたって火災共済の保険金額を見直していない場合は、万一の際に支払われた保険金で再建できない可能性があります。ぜひ、カリスにご相談ください。 事故例:落雷で門扉電気錠等が損傷 修理費120万円 外部配電盤より出火 修理費34万円 ※本ご案内は「カトリック火災共済制度」の概要をご紹介したものです。ご契約にあたっては、必ず「重要事項説明書」をお読みください。 カトリック共済システム 株式会社カリス 連絡先 ☎0120-77-0033 24TC-001468 (2024年6月作成) リスク・補償に関してお気軽にお問い合わせください

2024年4月から相続登記の義務化スタート これまでの相続も対象 相続した不要な土地の国庫への帰属手続、遺言書作成などは、まずは、お電話を!! 司法書士 山下 緑 事務所 ミカエル 山下 緑 〒854-0014 諫早市東小路町10-21 電話 0957-22-6177

なが さき せき ちよう 長崎石彫 石碑 文字彫刻 墓地工事 リフォーム 墓地分譲 ヨゼフ 岩永 貴弘 ☎(095)862-2469 長崎市花園町23-17 立岩公園前

2023年度決算に関する報告 カトリック長崎大司教区

単位：円

〔収入の部〕

科目	決算額
1. 経常収入	597,505,272
教区費収入	103,276,636
信徒	93,036,636
司祭	8,930,000
修道会	1,310,000
特定献金収入	22,765,150
神学生養成援助費(封筒)	9,387,331
聖ペトロ使徒座への献金	2,985,833
世界広報の日献金	1,778,896
世界難民移住移動者の日献金	1,883,151
世界宣教の日献金	1,772,771
宣教地召命促進の日献金	1,802,766
世界子ども助け合いの日献金	3,154,402
特別献金収入	12,993,793
本部関係献金	22,288
ミサ奉納金	7,826,673
ミサ献金(教区行事)	5,144,832
寄付金収入	230,465,505
出版物収入	2,062,961
研修会収入	2,953,020
広告料収入	1,339,000
購読料収入	89,500
裁判所手続費納入金収入	390,000
宗教活動収入	376,335,565
非課税事業収入	3,244,181
非課税事業収入	3,244,181
車両運搬具売却収入	2,000,000
資産管理収入	2,000,000
受取利息	496
雑収入	4,362,076
雑収入	4,362,572
小教区拠出金	211,562,954
2. 経常外収入	50,777,513
繰入金収入	49,981,000
繰入金収入	49,981,000

科目	決算額
預り金等収支差額	796,513
(1) + (2) 収入合計	648,282,785
3. 前年度繰越金	72,641,190
収入の部合計	720,923,975

〔支出の部〕

科目	決算額
1. 経常支出	588,632,991
宗教活動費	23,222,129
祭儀費	4,453,066
行事費	8,065,096
教化費	751,302
研修費	447,829
図書費	410,030
出版刊行費	4,996,228
神学生養成費	344,120
司祭生涯養成費	1,082,646
法務事務所運営費	890,000
教区評議会活動費	1,781,812
管理費	39,117,091
会議費	1,319,115
旅費交通費	124,079
通信費	2,751,627
接待交際費	2,549
消耗品費	4,436,193
修繕費	778,635
図書費	24,902
水道光熱費	10,010,426
リース料	889,247
諸会費	37,000
保険料	4,445,360
自動車諸費	616,715
公租公課	691,261

科目	決算額
保健衛生費	344,972
支払手数料	5,990,498
不動産管理費	1,056,045
雑費	5,598,467
宗教活動支出	62,339,220
非課税事業支出	1,836,335
非課税事業支出	1,836,335
給与手当	290,768,095
退職金	2,220,000
福利厚生費	2,284,288
法定福利費	34,177,729
人件費	329,450,112
器具備品購入支出	2,378,860
資産取得支出	2,378,860
助成費	1,955,823
補助金支出	1,955,823
負担金支出	50,672,641
負担金支出	50,672,641
寄付金支出	140,000,000
寄付金支出	140,000,000
2. 経常外支出	24,322,015
繰入金支出	24,242,500
繰入金支出	24,242,500
過年度収支修正	79,515
(1) + (2) 支出合計	612,955,006
3. 次年度繰越金	107,968,969
支出の部合計	720,923,975

2024年 四旬節愛の献金
総額 5,316,043円 (6月30日現在)

上記の他、直接カリタスジャパンへご送金いただいている分もあります。皆様のご支援、ご協力に心から感謝申し上げます。

カリタスジャパン長崎支部

2024年度 第1回 教区顧問会

6月17日(月)長崎大司教館で、2024年度第1回教区顧問会が行われました。主な審議事項は次の通り。
 2023年度教区収支決算書案を審議し、それを承認した。
 2024年度年間運用計画を変更する事情が生じたため、その運用計画変更が承認され、それに伴う2024年度の財政調整基金特別会計の補正予算が承認された。
 昨年からの審議されてきた旧ロザリオ幼稚園(稲佐)の解体に関して、今年3月に見積りが提出されていた。相当の費用が見込まれるため諸条件を調整し、手続きを進めることとなった。
 また、前回の顧問会(3月)で「子どもと女性の人權相談室規程」が承認されていたが、その後同相談室に関わる「対応委員会」「第三者委員会」ほか関係者の合点が開か

2023年度収支決算承認 長崎教区の現状報告

宗教法人カトリック長崎大司教区の2023年度収支決算書および財産目録が、6月17日開催の教区顧問会で承認された。
 収入の部で前年度決算を大幅に上回ったのは複数の大口寄付によるもの。その中には教区評議会からの寄付も含まれる。教区行事のミサ献金

新刊良書

★見よ、それはきわめてよかったー総合的なエッセイへの招き
 著||日本カトリック司教団 勅「ラウダート・シー」ともに暮らす家を大切に」に学び、神、他者、自然、そして自分自身との調和ある関係を求めつつ生きていくよう呼びかけることにも、「観る」「識別する」「行動する」という三段階を通じて、エッセイを通じての理解を促し、実践へと招く。

支出の部では寄付金支出が高額となっているが、これは教区を通じてカトリック学校へ寄付する

2024年度は教区施設統合が具体化していく。7月中旬からは大司教館の改装工事が始まり11月中旬に完了予定。その後、現在カトリックセンターにある教区本部機能が教区に移転することとなる。12月末には聖年も開幕するので、教区の活動が経済的にも適正な裏付けに支えられ継続発展するよう努めたい。

教区会計 嘉松宏樹

感謝

— 寄付 —
 長崎大司教区
 ● 匿名様
 ● 道向正子様
 ● 中島仁様、裕様、史朗様
 — 香典返し —
 長崎カトリック神学院
 ● 今村辰次様(大崎)
 ● 故マリア今村美和子様
 右の方々からご寄付・ご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

2023年度決算に関する報告 72小教区決算集計表

単位：円

〔収入の部〕

科目	決算額
1. 経常収入の部	1,052,907,603
教会維持費	374,478,244
ミサ献金	90,875,819
ミサ奉納金	177,561,545
祭儀献金	54,499,547
寄付金収入	42,595,284
教区補助金	2,795,000
その他の献金	43,907,631
行事収入	6,211,969
非課税事業収入	2,760,615
宗教活動収入	795,685,654
積立金収入	52,663,170
墓地納骨堂管理費収入	17,956,552
維持管理収入	70,619,722
教区費	94,688,781
神学生養成援助費(封筒)	9,035,071
世界こども助け合いの日献金	1,904,146
世界広報の日献金	1,747,686
聖ペトロ使徒座への献金	1,841,359
世界難民移住移動者の日献金	1,856,407
世界宣教の日献金	1,742,172
宣教地召命促進の日献金	1,746,557
特別献金	3,016,930
一葉募金	6,005,127
クリスマス募金	4,822,373
カリタスジャパン募金	7,492,652
その他の募金	5,377,428
預り金・献金収入	141,276,689
受取利息	22,197
雑収入	45,303,341
その他の収入	45,325,538
2. 経常外収入の部	229,184,505
資産運用収入	3,640,000
器具備品売却収入	2,646,000
資産運用収入	6,286,000
退職給付引当金繰入収入	100,000
特別目的預金取崩収入	76,674,222
その他の繰入金収入	36,547,575
繰入金収入	113,321,797
内部借入金収入	42,300,000
借入金収入	42,300,000

科目	決算額
預り金収入	5,467,084
補助金収入	1,020,370
その他の経常外収入	60,789,254
その他の収入	67,276,708
3. 前年度繰越金	1,102,755,859
収入の部合計	2,384,847,967

〔支出の部〕

科目	決算額
1. 経常支出の部	899,275,869
祭儀費	42,540,951
教化費	27,612,696
補助金支出	24,398,410
寄付金	5,236,039
図書費	4,715,642
出版刊行費	7,994,818
行事費	39,245,978
負担金	26,371,987
会議費	2,439,385
消耗品費	26,301,954
リース料	14,588,721
通信費	11,625,151
旅費交通費	10,709,208
自動車諸費	22,212,203
水道光熱費	77,020,585
接待交際費	16,697,229
非課税事業支出	1,382,531
支払手数料	4,495,312
宗教活動支出	365,588,800
修繕費	51,469,587
保守管理費	31,279,128
墓地納骨堂管理費	4,714,919
保険料	28,793,647
公租公課	312,957
維持管理支出	116,570,238
給与手当	211,413,205
雑給与	23,723,237
福利厚生費	15,705,150
法定福利費	2,463,056
人件費	253,304,648

科目	決算額
教区費	94,526,245
神学生養成援助費(封筒)	9,231,604
世界こども助け合いの日献金	1,924,648
世界広報の日献金	1,792,500
聖ペトロ使徒座への献金	1,865,338
世界難民移住移動者の日献金	1,870,504
世界宣教の日献金	1,787,059
宣教地召命促進の日献金	1,804,481
特別献金	8,017,925
一葉募金	5,961,150
クリスマス募金	4,969,755
カリタスジャパン募金	7,396,206
その他の募金	5,279,351
預り金・献金支出	146,426,766
雑費	17,385,417
その他の支出	17,385,417
2. 経常外支出の部	173,734,483
土地取得支出	971,259
建物取得支出	38,145,182
構築物購入支出	2,591,914
器具備品購入支出	22,068,460
資産取得支出	63,776,815
退職給付引当金繰入支出	1,340,000
特別目的預金積立金繰入支出	70,164,075
修理費積立金支出	2,087,473
繰入金支出	73,591,548
内部借入金返済支出	20,030,985
外部借入金返済支出	2,862,761
借入金返済支出	22,893,746
預り金支出	6,092,974
その他の経常外支出	2,612,368
その他の支出	8,705,342
予備費	4,767,032
3. 次年度繰越金	1,311,837,615
支出の部合計	2,384,847,967

	2022年度	2023年度
世帯数	17,117	17,000
①維持費/世帯数/月	1,825	1,836
②教区費/世帯数/月	471	464
③教区費/維持費(%)	25.8	25.3
④ミサ奉納金/世帯数/月	898	870
⑤ミサ献金/世帯数/月	408	445

長崎教区災害対応ワークショップ 「寄り添い」の心をもって準備を整える

ERST緊急対応支援チーム 片岡英和 (長崎教会管区災害支援室担当)

6月21日(金)長崎大司教館において長崎教区災害対応ワークショップが、中央協議会ERSTメンバー参加のもとで行われました。

まずERSTというものはEmergency Response Support Teamの頭文字をとったもので、日本語にするのが緊急対応支援チームです。東日本大震災時、日本の教会はオールジャパン体制で支援にあたりました。その経験を生かし、今後起こりうる災害支援に向けて、チームメンバーは過去のボランティアアベース運営の経験者らで構成されています。秋田の大雨災害(2023年7月)、能登半島地震(2024年1月)などの被災地にも派遣され支援体制構築などの援助を行っています。



現在ERSTは、被災地の支援活動とは別に各教区における災害対応ワークショップを行っております。日本は災害大国と呼ばれるほど災害に見舞われる頻度が多い国です。

今回のワークショップでは大雨・台風災害が起きたものと設定されました。1982(昭和57)年に起こった長崎大水害以降、長崎における浸水被害というものは格段に減少しております。それは大水害以降、それに耐える治水工事が行われ、結果によるものですが、

長崎教区でのワークショップに参加したメンバーは、中村大司教をはじめ、教区本部事務局、教区評議会議長・女性部長のほか、教区本部事務局職員2人、教区会計職員1人、さらに修道会から純心聖母会3人、お告げのマリア修道会1人でした。

現在、長崎県においても避難所等の確保に着手している状況で地域の協力が必要となっております。地域の中にある教会として、また信徒として、どのような形で関わっていくのかを考える時が訪れています。いづれにせよ今後は「寄り添い」の心をもって、物心両面の準備を整えることが必要な時が訪れていることを心に留めておきましょう。



写真は、6月21日に長崎大司教館で行われたワークショップの様子。①はERSTのメンバーと参加者。②はカリタスジャパンが編集した「災害対応マニュアル」(青・準備編、黄・対応編)を手説明するメンバーの一人、漆原さん。

純心聖母会から 会の創立90周年に寄せて



創立90周年ロゴ
デザイン Sr.深堀晴美

純心聖母会は今年6月9日に創立90周年を迎えました。私たちは創立者ヤヌワリオ早坂久之助司教と共同創立者シスター江角ヤスから、「会のカリスマ」という大切な霊的遺産を受け継いでいます。それは、創立者が目指した「与え尽くす十字架上のキリスト」の愛に倣って、「聖母への信仰」を「マリアの汚れなきみ心の霊性」、「日本の殉教者の精神」という会の霊性を生きたがら福音を宣べ伝え、人々を救いに導くことを目的としています。

私たちは昨年6月9日「創立90周年オープニングミサ・セレモニー」で幕開けをして以来、1年をかけて会の霊性を深め、全共同体の「会の霊的宝箱」が、高齢姉妹から若い世代に霊的バトンとして手渡されました。

翌、創立の日には「タイムカプセル保管式」を行いました。カプセルには、全会



員がそれぞれにたまためた「創立100周年の本会に託す希望の手紙」が収められました。これからは、聖母マリアの汚れなきみ心を生きて私たちが福音宣教の航海は続きます。

皆さまに感謝！

純心聖母会

「アライ・カプア」活動開始から1年

お告げのマリア修道会の取り組み

①

アライ・カプア
—互いに助け合う—

お告げのマリア修道会は、2021年開催の第9回総会において決議決定



アライ・カプア教育財団のロゴ

人々の生活や環境整備などを支援する動きは共同体や個人においてさまざまに見られる。お告げのマリア修道会では昨年、フィリピンでの「アライ・カプア」の活動を開始した。祈りと行動をもって人々に奉仕する同修道会の新たな取り組みについて、数回に分けて執筆いただく。

された「キリストの兄弟である『もとも小さい者』への奉仕」の一環として、昨年5月からフィリピンのマニラ市にある「アライ・カプア教育財団」の支援を行っています。Alay Kapwaとはタガログ語で「互いに助け合う」という意味です。

この財団は、善き牧者愛のシスタークリスチンと同志4人のシスターが貧しい人々のために行った活動から始まりました。政治的にも混乱し犯罪と暴力が日常化する中、シスター方は安全な修道院を出て貧しい地区レベリザに移り住み、彼らと共に彼らの信仰生活と経済的自立を目指し、「レベリザを小



シスタークリスチン

フィリピンの事を
知らせてほしい

さな天国にしたい」との願いを込めて働かれました。

ある日シスタークリスチンは、親交のあった「お告げのフランシスコ姉妹会」のシスターに、彼らが作った製品を日本で売り、フィリピンの事を知らせてほしいと頼みました。

こうしてお告げのフランシスコ姉妹会のシスター方が長年にわたって支援してこられた活動を引き継いでいただき、不慣れな私たちが、シスター方と同じ心でマリア様の「お言葉通りになりますように、の意」を胸に励んでいます。

お告げのマリア修道会

林さゆり

母校で教区司祭黙想会

福岡・旧大神学院に集う



毎年6月開催の教区司祭黙想会。2024年度は6月と10月の2回に分けて実施されるが、6月10日(月)から13日(木)まで福岡市の旧大神学院を会場に行われた。

テーマは「人はなぜ回心しないのか」。説教師の牧山強美師(サン・スルピス司祭会、長崎教区司祭)から母校に迎えられる20人の教区司祭は、記録を眺め、記憶をたどり、世代を超えて神学生時代の心を思い出した。そこには、互いに聴き、思いめぐらし、語り、祈り、汗を流し、食卓を囲む司祭団の姿があった。

10月の黙想会は、15日(火)〜18日(金)の日程で熊川幸徳師(サン・スルピス司祭会、長崎教区司祭)を説教師に迎え、カトリックセンターで行われる予定。(写真は旧福岡カトリック神学院)

司祭らが交流深める

西日本司祭団ソフトボール大会



5月14日(火)、西日本司祭団ソフトボール大会、交流会が大阪で行われた。新型コロナウイルス感染症の影響で2019年の長崎大会以降、開催されなかった。前田万葉枢機卿、酒井俊弘司教、白浜満司教、森山信三司教をはじめ、約70人の司祭らが集まり、日中はソフトボールを通して、夕方からは食事を通じて交流を深めた。

淀川河川公園で行われたソフトボール大会では、若い神父たちの活躍により前評判通り長崎教区が優勝したが、決勝の後、前田枢機卿の提案で長崎教区対他教区選抜の試合が行われ、枢機卿も長崎教区で出場し、打点0→(正)混宗婚0、異宗婚1。

短 信

浦上教会の広報誌600号発行
広報誌「神の家族」が6月2日600号を発行した。1974(昭和49)年4月に第1号が発行されて以来50年になる。

お知らせ

一葉募金からの支援
火災により被災した、

訂 正

青方小教区信徒へ見舞いのため15万円(6月13日送金)、大小小教区信徒へ見舞いのため15万円(6月18日送金)。

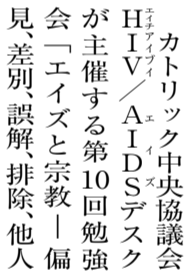
6月号3面の「長崎大司教区現勢統計表」について神崎小教区の「結婚」の項目に誤りがあり、次の通り訂正する。

(誤) 混宗婚1、異宗婚0
(正) 混宗婚0、異宗婚1。

これに伴い「総計」も、(誤) 混宗婚1、異宗婚78→(正) 混宗婚0、異宗婚79。

「エイズと宗教」考える

中央協主催の勉強会 長崎で開催



カトリック中央協議会HIV/AIDSデスクが主催する第10回勉強会「エイズと宗教―偏見、差別、誤解、排除、他人



事意識を変えるには」が6月15日(土) 13時から16時までカトリックセンターホールで行われ、集まった約120人の人々が共に学びを深めた。

2009年6月に開始し、今回初めて長崎で開催されたこの勉強会。はじめに、同デスク担当司教の中村倫明大司教が、浄誓寺の僧侶、古川潤哉師がそれぞれに話をし、自身を取り巻く環境やさまざまな活動を通しての実際の見地・考えを語り、皆熱心に聴き入っていた。

休憩後は、同デスク専門委員のイグナシオ・マルティネス師(ゲアダルベ宣教会)をファシリテーターに、先の4人を登壇者に迎えて、参加者から寄せられた質問に答える形でパネルディスカッションが行われた。「HIVがなぜここまで理解されていないか」「今後の取り組み、活動は」「治療に関して知りたい。また、HIVに感染した人はどのような病気で亡くなっているのか」「宗教者としてこれらの問題に関わるように、宗教の違う上で、気がついたことなどは」といった質問に対し、登壇者はそれぞれの立場からの視点を織り交ぜながら、分かりやすく答えた。

終了後、参加した人からは「学ぶことが多く、もっとたくさんの人と聞くことができたら良かった。このような勉強会をまた開いてほしい」「地元なので、もう少し神父様たちが参加されるかと思った」「こういうテーマを私たちが普段から話し、宗教を抜きにして人として思うところを皆で分かち合っているのではないかと。差別された人の気持ちを考える、温かい教会であってほしい」といった声が聞かれた。

(写真はパネルディスカッションの時の様子)

「みんなが捜しています」テーマに 大司教と青年の交流会

毎年父の日(6月第3日曜日)に近い日曜日に近づく中、大司教を探し回られる教区青少年委員会主催の「中村大司教様と青年の交流会」が、今年6月9日に開催された。

今回はスポーツ以外のプログラムで交流したいという要望に応じて、「みんなが捜しています」(マルコ1・37)という聖書の言葉をテーマに、イエ

スを探していた弟子のようの中村大司教を探し回られるコンセプトでポストゲームを行った。

浦上、大崎、滑石、城山、本原、時津、大野の各教会から24人の青年が参加し、シスター2人、司祭10人も参加。レクリエーションでは大司教に関するこのクイズで〇×ゲーム、その後、浦上教会、カトリックセンター、大司教館の体育館を回ってポストゲームを行った。



最後に中村大司教から紋章についての説明とこれにまつわるエピソードを聞き、参加者は大司教のメッセージに対し理解を深めた様子だった。16時頃終了した。

教区青少年委員会主催 高校生黙想会

テーマ

2027年WYD ソウル大会に向けて

2023年WYD リスボン大会を振り返る

日時 8月11日(日)10時~15時

場所 長崎大司教館 第一会議室

お問い合わせ・お申し込みは、各地区の担当司祭または大崎教会(TEL 0956-47-6188)までお願いいたします。



た後は、再びソフトバレーを楽しみ、19時からは長崎駅前飲食店で食事を開き、再会を願いつつ解散した。

5月18日逝去。91歳。1933年東京生まれ。20歳の時に受洗し、29歳



マリア・インマクラータ
長文枝修道女
(お告げのマリア修道会)

で聖母被昇天会に入会。75年にお告げのマリア修道会に転属し、78年終生誓願宣立。

本会では養成担当児童養護施設「浦上養育院」の施設長を長きに渡って務め、児童養護のために力を尽くした。また、フランス語を通して地域にも貢献。施設長を退任してか

らお祈り係として共同体を支えた。一見厳格に見えるが、若いセンスとユーモアを持つシスターだった。3年半ほどの療養を経て、老衰のため、聖霊降臨の前日に御父のもとに静かに旅立った。

葬儀ミサ・告別式は5月20日、お告げのマリア修道会大聖堂で行われた。

マリア
松下サナエ修道女
(お告げのマリア修道会)



5月31日逝去。92歳。1931年平戸市生まれ。50年入会、75年初誓

願、80年終生誓願宣立。

主に共同体の調理、司祭館奉仕など食に関わる任務にあたり、おいしい料理と温かい笑顔、細やかな気配りでもてなした。約25年前に難聴を患ったが明るく朗らかで、手先の器用さを生かしてカーディガンやふくれ饅頭などを作っては多くの

人の喜びとなった。4月から光の園老人ホームにお世話になっていたが、容態が急変し、聖母の訪問の祝日に御父のもとに旅立った。初誓願からおよそ50年の奉獻生活だった。

葬儀ミサ・告別式は6月2日、田平教会で行われた。

カトリックセンター 今に続く これまでの歩み見つめて③

1969
1970
1971
2024...

カトリックセンターに所在を置く教区本部事務局や法人会計事務室などは2025年1月、大司教館へ移転する予定。移転に伴い、教区ではよりよい現場環境となることを目指すとともに、センター土地建物の今後について検討していくこととなる。1971年の落成以来今に続くカトリックセンターのこれまでの歩みを、『教報』の過去の記事から見つめる。

1972(昭和47)年11月号。71年10月4日に落成し翌5日から教区司祭の黙想会でスタートしたセンターについて、「カトリックセンターこの一年」と題する記事が掲載されている。

この一年——
使徒職を担う信徒の養成
研究の場として

記事の冒頭に「使徒職を担う信徒の養成あるいは研究の場としてのセンターの存在意義は大きいものでなければならぬ」と思われるが、落成後1年で、その点に関してセンターの果たしている役割は完全とは言えないまでも、徐々に機能を発揮しているというのが現状」との一文。報告は続き、「信徒使徒職室」



カトリック教報社は、当時は教会の司祭館で作業をしていたが、センター完成後はセンター内の専用の一室で教報の編集や発送などを行うようになった。

ホール、講堂、会議室は、各種講座、手芸教室、使徒職団体の会議や研修の場として利用されており、「各小教区団体や一般信徒の会議、その他、信徒であるのかかわらず利用を希望する一般の人にも広く利用していた」ように努めているとある。

司牧企画室は、移住者対策、結婚講座、その他の仕事を積極的に推進。援助マリア会のシスターが常勤で働いていた。

神学講座事務局は、教区信徒の教理理解の深化を目指すとともに、教区内における使徒職活動の遂行のために必要とされる神学的知識を身につける目的で開設され、レデンプトリステン修道会のシスターと純心短大(現、純心大学)出身の方が常勤していた。開講した「神学講座」は、基礎課程、上級課程、神学入門講座があり、センターがスタートした翌春に基礎課程を修了し要理教師2級資格認定書を授与(左の写真)された人は66人。夏期神学講座も開講した(参加者125人)。

「司牧企画室」神学講座事務局「カトリック教報社」ホール、講堂、会議室」の各部屋に分けて利用状況が述べられている。

当時、信徒使徒職室利用の公認団体は、長崎教区信徒使徒職評議会、ピンセンシオ・ア・パウロ会、レジオ・マリエ、カトリック医師会、カトリック教職員協議会、カトリック看護婦会、カトリック勤労者連盟、カトリック青年連絡協議会とされており、この部屋は、使徒職推進の場」となっていた。

は白黒ながらテレビも置いて利用者に喜ばれている。

センターの維持と管理

「建物を建てた後の維持管理費が必要なことは常識であるし、建物の大きさに比例することも当たり前前の話。：(センターの収入は)カトリック信徒だけの利用に限定した場合は、これまでの経験から言えば、三分の一以下に減少する。これだけの建物設備を遊ばせておく手はないし、カトリックセンターが、社会に奉仕する意味合いから言っても、会合や宿泊に、安い料金で多くの一般の人々に喜ばれながら利用していただくことは、カトリックに対する好意をもつ機会を提供することになり、カトリックの再認識、あるいは、意図せざる布教の可能性も生じる。：

大浦の大司教館でなされていた教区事務は、センター内1階の事務所ですべて行われるようになった。事務所には、教区事務に生涯をかけて奉仕し続けて25年という友永忠次さん(当時、のちの終身助祭)が、宗教法人関係の業務をはじめ、電機、機械の仕事をし、一年中無休で働いていた。

また、1階ロビーには聖パウロ女子修道会の書籍聖具関係の販売コーナー。同会のシスターが毎日出勤して受付も担当。午後4時半から真夜中にかけての受付には、信徒2人の方が交代で担当している。

センターは5階と6階に宿泊設備を整え、1971年10月25日付で旅館業の認可をうけ業務を開始。初年度の宿泊者総数は5897人だった。セルフサービスシステムを採用してルームサービスは一切しないが、新しい設備、安い宿泊料金、接客においても評判は悪くなく、個室に

「私たちがのような信者でない者もいるのですか」とお尋ねのお尋ねる一般の方々に、センターを喜んで利用していただくようこれからも努力したい。教区と全信徒の共有の財産であるカトリックセンターは、1年で使い捨てにするような安物の軍手やムギワラ帽子と同様に考える訳にはゆかない。利用者側と管理者側の間に共通の意思が必要だと思われるので、センターの維持管理に対する関係各位のご批判とご協力を心からお願ひ申し上げます」

当時センターには、司祭、修道者、信徒、また一般の利用者も含め多くの方々が出入りし、活気がみられたようだ。落成式の際に里脇大司教が述べた「センターが、神と社会への私たちの奉仕の場として生かされること」が何よりも願われていた。

*引用箇所は一部編集済み。記事の文中には時代性をもった表現があります。ご了承ください。

主の平安
カトリック式葬祭・飾付一式

(有) 栄光式典社

代表取締役 ヨハネ 西村 勇二

長崎市辻町7-18 TEL(095)844-4011
24時間営業 FAX(095)843-9896

ハマチ・タイ養殖、アジ・イワシ加工、中型旋削

エテルナ・ワコー(株)

代表取締役 ドミニコ 溝口 悦雄
〒858-0926 佐世保市大湯町586
TEL(0956)47-4380

注文家具の店 家庭祭壇・聖具・祭壇・長椅子・朗読台

佳織木工所

《家庭祭壇ギャラリーOPEN パンフレットもごさいます。》
〒857-0032 佐世保市宮田町7-7
☎0956(23)1867 代表 ヨハネ 濱口 知博

マイホームの美容と健康に!

(有) 山川 塗装

有限責任中間法人 全国住宅火災防止協会
長崎県建物営繕工事業協同組合理事

代表取締役 ベトロ 山川 進

佐世保市原分町1715-5
TEL(0956)49-3330 FAX(0956)49-8729

世界平和へ祈りを…

明治石材

業務内容
お墓建立
納骨堂販売
お墓のリフォーム
霊名彫刻

長崎本店 長崎市城栄町13-1
大村店 大村市赤佐古町287番地
HP http://meijisekizai.shopinfo.jp
電話 (095)846-3598
電話 (0957)50-3008

内科・循環器科

医療法人 **平田クリニック**

院長 ヨゼフ 平田 哲也
通所リハビリテーション
上野町グループホーム・サービス付き高齢者住宅
長崎市上野町1-5 TEL 095-845-6175